

世尊偈を讀む

秋 山 嶺 二

淺薄な思想に幻しの様な自信を貧弱な頭腦でおほつかなくも書きしめるのであるから、この様な事は僕にふさはしくない事は思ひつゝ、何故かしらそうせねばならない様な氣がしたので、恥かしさをしのんで書く事にする。

きつこ間違つてゐるであらう僕の思ひが、この事を通していくらかでも改める事が出来たなら、大慈悲の菩薩は僕のはしたない行ひをゆるしてくれる事と思ふ。過去二十何年かの僕の生涯の上に絶えず無垢清淨の光をなけてあやまちの淵に沈まふとする僕を幾度事が救つてくれた限りなきいつくしみ、自からのいたらぬ業のためにおそひかゝる無量の苦しみに應じて安らぎを與へたまひし恵み、それがいくらかづゝでも感ぜらるゝ様になつた今日寂しくも自分は微笑ますにはゐられない。そうした微かなれどつきる事のない喜びにいざなはれて觀音を自分を考へて見る事にする。世尊偈の中に於て最も大切なのは聞名及見身の一句であらう、即ち聞名は心の耳の上に觀世音名を信受する事であり、見身は身の上に觀音の姿の具現を見る事である。如何に大道長安に通じ道は古今に渡るに雖も、それを體認せずしては長安に到る事も出来ねば、古今に獨歩する事も不可能である。いたすらなる地上の願ひに汲々として觀音の切なる法聲に耳傾げざれば、如何に學すとも永遠に天上の悅樂を味ふ事は覺束ない。又如何に萬徳をつむとも達磨に無功德の一喝せられた梁の武帝の如くそれは眞理の都へ旅立つべく何等の糧にもならないのである。聞名は信仰の第一歩であるから心をつくし身を碎いても觀

音の名を確實に聞かねばならない、三千大千世界の火をも過ぎて名を求むる覺悟なくしては岩の上に城を築く事は出来ない、あらはなれども容易に聞く事の出来ないのが肉耳を越えて聞こしなへに宣流されてゐる觀音の微妙音である。實にキリストをして叫べしめた如く天國に入るの門は狭い、そしてそれには眞實を求むるために赤子の如く素直なる心になつたもののみ入り得るのである。聞名及見身の一關を通過せずしては觀音の妙智力に參ずる事は出来ない、隻手の名を信受する事なしに彼の觀音の力を念ずる事は不可能である、名を聞かざるものは心一つにして名を求めよさらば與へらるゝであらう、身に見ざるものは至心に閉ぢられたる心の扉をたゞけさらば必ず開らかるゝであらう。要するにあらゆる宗教の本質が信の一字によつて解決せらるゝのであるから此の觀音經に於ても聞名及見身の一語を通して信の世界を指し示してゐるのである。

まことに信仰は暗夜の燈火であり、貧人の寶である。僕の様が儘で然かもつまらない心の持主に取つて信なくしては生くるまいふ凡てが耐へられない事だ、何に一つとして満足な心を注ぎ得るもののない現在に於て信のみが唯一の嬉びであり安らひであり生くる糧である。自からが自からの上に望みを失つた生活に光りをなけるものは信といふ救ひの一道より外ふさはしいものが見當らない、若い心をめぐる様々な心を取り上げて見てそれが凡て重苦しい惱みである時、救ひを信んずる事なくしてさうしてこの可弱い姿を長らへてゆく事が出来ようか。諸の方所に應じ利こして身を現ぜざるなき救ひのいつくしみを信じてこそ、無量の苦しみ身に逼るともそれに耐へて漕ぎなき人生の一人旅をつゝがなくも辿る事が出来るのである。實に信は凡てのものの源であるま同時にそれらに光りを與へてゐる微妙な力である。

以下つたない自からを世尊偈の上にうつし出して現在の自分の姿を眺めて見る事にする。

世尊の聖歌

世尊は妙なる御姿具はり給へり

我今重ねて彼を問ひ奉る

等しく佛子なるを如何なる理りにより

觀世音ミ名づけ給ふや。

妙なる輝きに満てる世尊は

聖歌をもて無盡意に答へたまはく。

汝觀音のひたすらな法行をきけ

よく處ミして姿の應現せざるはなし。

慈しみの深き事海の如く

恵みの限りなき様とこしなへに思議し難し

遍ねく諸佛の御前に侍して

清淨の大願をおこせり。

我汝が爲にそを略して免かん

彼の名を信受し身に見るに及びなば

心に念じてあだに過すなかれ

よく様々の憂苦を滅さん。

たみひ怒の心の渦巻きて

大火口に推落するの危きにいたるも

彼の観音の力を念ぜば

烈火の焔は安らひの泉ならん。

或ひは漚てなき思ひの大海原に漂ひて

悪しざまなる誘ひを受けんに

彼の観音の力を念ぜば

誘ひの波浪も身を没する事能はじ。

或ひはおごりの高らかなる峯にありて

ひとのため推し落さるゝも

彼の観音の力を念ぜば

日輪の如くして安らかなるに住ぎまらん。

或ひはいたづらな心のせまりて

金剛の堅き願もうち捨てられんに

彼の観音の力を念ぜば

内なる願ひに於て寸毫のそなひも受けじ。

或ひはみだらなる思ひの起りて

様々に身を惱さんに

彼の観音の力を念せば

悉く皆いつくしみの心を生まん。

或ひは王難の苦にあひて命終るが如き

窮迫の悲境にたちいたるも

彼の観音の力を念せば

災危のつるぎは切れぎれに折れなん。

或ひは自からの作る様々なかせのため

自縛の苦しみにあるも

彼の観音の力を念せば

苦しみの縛より脱がるゝを得べし。

或ひはのろひやたくらみの思ひ湧きて

自からをそなはんニ欲せんに

彼の観音の力を念せば

呪詛それ自身にて滅されん。

或ひはいらだち貪ほり等の心の

限りなく身に逼らんも

彼の観音の力を念ぜば

わずらひ身に及ぶ事なけん。

若しくは畏怖の思ひ群らがりて

おのゝき胸に滿つるも

彼の観音の力を念ぜば

慄ひ恐るゝの思ひこく退かん。

ねたみやうらみの心勝りて

火煙のきそひ立つ如からんに

彼の観音の力を念ぜば

念するに隨ひて自然ニ姿をひそめん。

或ひは心にもなき凶危

雲雷大雨の如くおそはんに

彼の観音の力を念ぜば

時に應じて不安の思ひは消え去るを得べし。

かくの如く諸人様々な困危にあひ

限りなきの苦しみに逼るこも

観音妙智の輝きは

よく世間の苦しみを救ふ。

神秘の妙力をそなへ

廣く方便の智をおさめて

普ねく全世界をおほひ

何地の涯にも姿の現れざるはなし。

悪しきにいざなふ様々なる願ひ

いかりや食ほりねたみの思ひ

及び生老病死の苦に於て

それらを漸くにして悉く滅せしむ。

眞正にして清淨なる觀察眼ミ

廣大にして無邊なる智恵の觀

ならびにあはれみ慈しみのねぎらひを

常に願ひ常に讃仰すべし。

無垢にして清らかなる光りは

日輪の諸の暗冥を破するが如く

よく迷妄の境を越えて

昔なく明かに人の心を照耀す。

あはれみの揺ぐ様は雷の震ふが如く

いつくしみの妙なるは大雲のかゝるが如し

甘露の法雨をそゝいで

煩惱の炎を滅ほし除く。

あらそひやさばきの心競ひ

或ひは戦ひの巻にあるが如き恐怖あらんも

彼の観音の方を念じなば

様々のあだなる念ひ悉く退かん。

あらゆる憂ひの胸に安らひをもたらす微妙音

惱みの淵に潮の如くそゝりくる聖なる高なりは

人の心の私なる叫びを越ゆるの響きあり

この故に須からく常に念すべし。

妙智力を讃えて念々に疑ひを生むなかれ

觀世音の聖淨なるおこなひは

苦惱死危の境に於て

よく一切を導いて止まず。

あらゆる聖徳を具なへて

慈しみの眼もて諸人を見守り

幸ひの泉はあふれて量り難し

是故に應に妙なる姿を讃禮すべし。

大正十三年十一月二十七日夜一時